グローカルβ　ＰＰＬ

担当　鈴木　涼子

【　令和２年度　プログレスコース２年　指導過程　】

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 時期 | 内　容 | 生徒の取り組み | 教員の指導 |
| 1年次 | グローカルβ「ローカル課題研究」として、学校プロジェクトに取り組む。 |  |  |
| 2年次  4月 | 岡本尚也著『課題研究メソッド～よりよい探究活動のために～』をテキストとして、課題研究の進め方について具体的に説明。 | 自分の興味関心と社会課題の重なる部分にどんな課題があるか考える。1年次のそれぞれのプロジェクトを振り返り、課題をまとめ、見直す。 | 課題研究の進め方について全体でガイダンスを行い、1年次の振り返りとともに、課題をしっかり捉えるよう促す。 |
| 5月 | 昨年度の課題から、研究テーマを決める。  個別にアドバイスを受けながら、昨年度の課題からより具体的な研究テーマを導き出す。 | 情報を集め、先行論文を読み、具体的なテーマを設定する。 | 個別に面談をしながら、生徒の考えを引き出し、焦点を絞る。 |
| 6月 | 先行研究や事例を学び、研究テーマに関する理解と知識を深め、明確なリサーチクエスチョンを設定する。また、検証のための計画を立てる。 | Google Scholarなどを利用し、先行論文を調べ、研究テーマに関する知識を深める。また、上級生の先行研究等があればそこから理解を広げ調査を行う。 | 各生徒が主体的に取り組み、具体的に検証できる内容になっているか留意する。 |
| 7月 | リサーチクエスチョンの答えとなる「仮説」を立て、調査や実験の検証を行う。  また、中間報告会として、ゼミ形式で研究の内容を発表し、3年生からアドバイスを受ける。 | 先行研究や事例への理解を深め、リサーチクエスチョンの答えとなる仮説を立て、調査、検証を行うための計画を立てる。 | リサーチクエスチョンに対して、具体的な仮説が立てられているかどうか、指導する。 |
| 8月  9月  10月 | 夏休みを利用し、研究計画に基づいて、校内外におけるアンケート調査、インタビュー調査、現地調査、ワークショップなどの具体的な研究を進める。  中間発表を兼ねた、京都鳥羽高校とのオンライン交流。 | 各自、目的をもって調査、実験を行う。外部への協力依頼など、計画に基づいて、予備調査や実験を行う。 | 生徒と外部との間に入り、協力依頼や具体的なアドバイスを行なう。 |
| 11月  12月 | 調査や実験によって得られた結果から仮説を評価し、考察を行う。  校内での中間発表をポスターセッション形式で行う。 | 研究結果をまとめ、考察する。各自ポスターに研究内容をまとめ、発表する。 | まとめ方と発表の仕方を指導する。 |
| 1月  2月 | 新たな問いを立て、十分な考察を行い、研究内容をまとめる。  研究内容を他者と共有する。  全国発表会。成果報告会。等 | 内部、外部での発表に備え、研究結果をパワーポイントやポスター形式でまとめる。 | 生徒の研究内容を相互に発表し合い、アドバイスできるよう促す。 |

【　外部発表　】

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 期日 | 研究発表会名 | 氏　名 | 発表内容／結果 |
| 2021.1.30 | 「Global Meetings 2021」  2021年全国高等学校グローカル探究  オンライン発表会 | 石川　舞桜 | 「Multicultural Symbiosis Society」  【英語発表部門】金賞・審査員長特別賞受賞 |
| 我妻　里莉 | 「ゲンキナの商品開発」  【日本語発表部門】銀賞受賞 |
| 2021.2.6 | 「全国高校生MY PROJECT AWARD 2020」  地域サミット出場（オンライン）  （全国サミットは3月開催） | 石川　舞桜 | 「南陽市を多文化共生社会に」 |
| 我妻　里莉 | 「ゲンキナ世界に！」 |
| 佐藤　実莉 | 「フードロスと子ども食堂とそれからわたし」 |

　1年次のＰＢＬでは、学校プロジェクトとして「食と健康プロジェクト」「子ども食堂プロジェクト」「多文化共生プロジェクト」の3つのテーマを研究してきた（※令和2年度は「子ども食堂プロジェクト」を除く２つのテーマでプロジェクトを行った）。1年次前半で、全体で3つのテーマを学び、後半グループごとに分かれて研究を進めた。

　2年次のＰＰＬでは、原則として1年次の課題を踏まえ、それぞれ見出した課題を個人で深めていく方向で取り組む。今年度は、コロナウィルスの影響で、3月～5月までの臨時休校期間があり、オンライン上でのガイダンスと、個別面談を行った。臨時休校期間中やその後の学校再開の中で、なかなか各自のリサーチクエスチョンや仮説に至らず、また行動範囲や外部との交流も規制があり、苦慮した生徒も多い。テーマ設定においては、昨年度の研究内容から課題を見つめ直し、身近な問題として捉えることで内容を深めることができた生徒もいる。しかし、探究学習そのものに意義を見出せず、主体的な取り組みになかなか結び付かない生徒もいた。一方で、自らの研究が進み、外部との交流会や発表会を通してやりがいを得た生徒が、他への前向きな影響を与える場面も多く、生徒集団全体としては後半、それぞれの力量に合わせた達成感を得ることはできた。１年次のＰＢＬでのチームワークが必要なことはもちろん、２年次に個々の研究となっても、生徒同士が相互にアドバイスできるような機会や、他の教員や他学年・外部の生徒から助言を得られるような中間発表の場を設定しておくことが必要であると実感した。様々な視点からのアドバイスや高い評価を得ることで、探究学習そのものへの生徒の自己肯定感が上がり、自信と情熱を持って研究を進めることができる。

また、リテラシーの部分では、先行研究や事例など文献の読み込みが甘い生徒も多く、探究の深まりがなかった点も、今後の指導の課題である。

　今年度は、例年の全国規模の発表会が、軒並みオンライン上で行われたことで対応に追われた部分もあるが、遠方の学校との交流や全国規模の発表を間近で見ることができ、生徒たちにとっては良い刺激になった。特に、10月の京都鳥羽高校との中間発表を兼ねたオンライン交流では、1、2年生から代表生徒がそれぞれ参加、発表し、活発な質疑応答と交流ができ、相互に知見を深めることができた。1月、2月の全国サミット発表会においても、生徒の研究に対する主体的な取り組みや内容が高く評価され、今後の課題も明確になったことで、生徒のモチベーションにもつながった。